

## 劇団そら「GONEN～あれから

東日本大震災を題材にということで、どのように描かれるのか？というのは、お客さんも期待していたと思います。それを裏切らない冒頭の始まり方。客席から俳優が現れて、大きな音の中で叫ぶ。そのエモーショナルさに一気に世界に引き込まれて生きました。とても効果的で、「あ、震災にまつわる演劇が始まった！」とわかりやすくもありました。俳優も楽しそうでよかったです。とても好感をもちました。しかし、その後の物語は、” やりたいことの詰め合わせ” のように感じ、都合よくストーリーが進んでいくので、物語の感情の起伏についていけないお客さんが散見されました。「結婚式するのってそんなに簡単だったかな？」「結婚って家族を巻き込むから・・・」などと色々考えてしまってストーリーに置いていかれて・・・、といったような感じです。そして、特に気になったのは” 震災” を扱ううえで、作者がなにに「怒り」を感じているのか？ということです。パンフレットには、「今一度考えてほしい」と書かれていたので、作者は「あの震災を忘れてしまったの？」「考え続けて欲しい！」ということに「怒り」を感じているのかなあと思いました。そこに向かって物語がわかりやすく進めば焦点がはっきりしたと思います。例えば、物語は「プロポーズをオッケーするか、しないか？」だけの物語でよかったのかもしれませんが。その上に震災のことを乗せて、忘れていくことやシェアハウス、地元の死んだ人のことが気になりいまいち結婚に踏み出せなくて・・・となんだかんだあり・・・最後に、「プロポーズにオッケーする」など、そのくらいシンプルでもよかったかもしれません。日常の中においても、プロポーズして、結婚して、結婚式して、となると、短くても半年以上かかるような印象です。こういった結婚というリアリティのある設定を借りている以上そこに嘘をつけるが、実は嘘つけないのが演劇です。

最後に、この物語の中で、特に一番好きなセリフは、結婚を申し込まれて「い・・・え・・・す」といったのは、よかったです。「いいえ」というのかと思いハラハラしました。この語感センスは、なかなかの発明だとさえ思っております。

村上慎太郎